

自分の強みを生かせるから
仕事が楽しい。だから生徒も
イキイキと生きてほしい



CASE 1

生徒が主役の
授業づくりに
挑む先生

みぞかみ・ひろき／人権教育主任。教務部。教科は生物。教員7年目。小学校3、4年次の担任の先生が教職へのあこがれの原点。大学と大学院時代、10年ほど塾講師として講義型授業をした。その経験もあり、教員4年目の夏にアクティブラーニング型授業に切り替える際には、足がすくむほどの緊張感も味わったという。

一冊の雑誌が
教員人生を変えた

教師になって4年め。当時は、何だかモヤモヤしていたという。やりた
い授業ができていたかといえば、答え
は「ノー」。いかに生徒を静かにさせ、
ノートを取らせ、眠らせないかばかり
に気を取られ、溝上先生にとつての
「理想の授業」は、実現しないままだ
った。

アクティブラーニング型授業の実践・研究を
周囲の先生を巻き込みながら推進する

溝上広樹先生

芥明高校(熊本・県立)



↑生徒が撮ってくれた写真。これもアクティブラーニングの成果。溝上先生は、自分のプロフィール写真を活用している。



→グループで話しやすく、かつ、個人活動では集中しやすい。その位置と距離のバランスを考慮しながら、机の位置を綿密に調整した。

理想の授業とは、小学校3、4年のころに受けた授業。グループで話し合ったり、突然ディベートが始まったり、今思えばみごとにアクティブラーニング型授業だった。学校が毎日楽しく、公開授業では、「ぼくの先生ってスゴイだろ！」と、誇らしい気分になった。けれども今の自分の授業はどうだろう――。

そんな時、進路指導室にあった『キヤリアガイダンス(小誌13年7月号)』を手にした。小林昭文先生(現産業能率大学教授)がアクティブラーニング型授業のやり方を解説していた。

この方法なら、やりたかった授業ができるかもしれないと思った。何度か読み込んで、何本も下線を引いた。関連情報を図書館やネットで調べあげ、夏休みに一冊のノートを作った。それをもって13年9月から、生物の授業をアクティブラーニング型へと切り替えた。

最初の授業から生徒は変わったと

いう。一番よく寝ていた生徒まで起きだして、活発に動いていた。その生徒が先生のiPadを使って撮った写真(左上写真)。その写真は、生徒が動き出したという証。溝上先生にとつて宝物となった。

**授業で個性に気づかせる
果てしない挑戦**

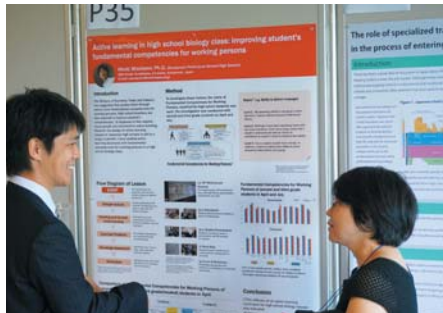
一番変わったのは、先生自身だった。授業をアクティブにするためにさまざまな工夫を開始した。グループワークがしやすくなるよう、理科室の机を2時間かけて移動(左写真)。KP法(紙芝居プレゼンテーション法)や看図アプローチ(コラム参照)、ポスターツアーなどに次々とチャレンジ。



PLUS ONE

なぜセーターを着たペンギンを見せる?～看図アプローチに着目

看図アプローチとは、福岡女学院大学の鹿内信善先生が開発した手法。溝上先生が鹿内先生をワークショップに招き、そこで学んだことを授業改善に生かした。最初に生徒に写真を見せ、そこに写っているものを書き出させる→書き出した要素を関連付ける→写真からどんなこと(物語)が予想できるかグループで話し合う——これは、いわば生徒の脳にスイッチを入れる作業。このような活動の後に、もっとも深く読ませたかった記事を読ませる。すると、読み込み方がまったく違うという。



↑今年9月につくば市で行われた国際キャリア教育学会にて、ポスターセッションで発表。アクティブラーニング型授業の取り組みをプレゼンした。

他の先生を巻き込むようにもなった。アクティブラーニング型授業のメリットを校内外に積極的に発信。校外で授業研究会を立ち上げ、小林先生のワークショップも実現した。さまざまな研究会、学習会に顔を出すようになり、全国にネットワークが広がり、オンラインで頻繁に授業改善

のやりとりもしている。「アクティブラーニングを始めて、本来の自分を取り戻しました」

大学院で博士号(理学)をとるくらい研究に熱中した研究肌。生来の強い学習意欲を発揮できるようになったからこそ、仕事が楽しいという。

「だから、生徒にもそうなってほしい。自分の特性に気づき、伸ばして、充実した人生を歩んでほしいんです」

授業でその足がかりをつくることを、これから追い求めていきたいと考えている。

手始めに2学期から、授業時のリフレクションを見直した。「授業での小さな成功や活用したスキル」などを尋ね、授業での個々の成功体験を次の授業につなげていく構想。道のりは遠いというが、そのプロセスを楽しんでいる溝上先生がいる。



今年3月の授業では、セーターを着たペンギンの写真を生徒に見せた。さまざまな想像を働かせた後、「環境問題」の記事を読ませた。

出典：「one green planet」
February 11, 2015

CASE 2

長期にわたり
学校改革を
推進してきた先生

うすだ・ひろかず／主幹教諭。進路指導部主任。教科は生物。教員32年目。公立中学・高校のすばらしい先生との出会いが教員を目指すきっかけ。03年から現在まで日比谷高校に勤務。同校は伝統的に教員より生徒が優秀だという。「私をはるかに飛び越えていく生徒たちを見てると、教員になって良かったと心から思います」

環境次第で人は変わる。
だから日比谷を、公教育を、
この手で立て直したかった

伝統の全人教育・全科目履修型教育を
推進しながら高い進学実績に挑み続ける

白田浩一先生

日比谷高校(東京・都立)



母校の輝きを
取り戻してみせる

白田先生は中学時代、カナヅチだったという。ところが高校の水泳合宿で鍛えられ、3kmの遠泳ができるようになった。「人間って、環境次第で変わるものなんだ」。学校の力、人間の可能性をまざまざと感じた。そこが母校、日比谷高校だ。

大学を出て、生物教師になった。生物という教科は幅広く、先端領域の変化が激しい。だから勉強は欠かせなかった。同僚と勉強会を立ち上

図1 日比谷高校 学校改革の歩み(一部抜粋)

2001年	独自入試実施(公立高校として全国初) 補習・講習の充実 東京都教育委員会より進学指導重点校の指定
2002年	45分7時間授業開始
2003年	シラバス配布と授業評価の開始
2005年	進学指導体制の強化 星陵セミナー開始
2007年	東京都教育委員会より進学指導重点校の再指定 文部科学省よりSSHの指定
2012年	文部科学省よりSSHの再指定
2015年	文部科学省よりSGHアソシエイトの指定 東京都教育委員会より東京グローバル10の指定

▶ SSH特別講演会(東大安田講堂)では、ノーベル賞受賞者であるOBの利根川進氏を始め、国内や海外から著名な専門家たちを数々招いている。

↓ 学校には「フォーコの振り子」など、本物を体感できる施設・設備が充実。理科関係の特別教室は、物理、化学、生物、地学で計7つある。また、「生物臨海実習」も実施されている。



げた。海や山でフィールドワークを重ねた。30代の頃には出版社から信頼を得て、生物に関する教科書や参考書を執筆した。

一方、いくつかの高校で臼田先生は教務のキャリアを歩んだ。30代前半で教務部長。まわりは年長者ばかり。不当とも思える圧力を受け、そのたびに戦ったという。「そうおっしゃいますが、責任とれますか? ここにお名前を書けますか?」

そう尋ねると逃げ出す人たちの仕事を、責任をもって全うできたと思っている。

目の前の仕事に忙殺されながらも、日比谷高校の変容は気にかかった。伝統の自学自習を履き違えて「自由・放任・ほったらかし」になっているように見えた。64年に193人を数えた東京大学合格者数は、80〜90年代を通じてほぼ一桁で推移。母校の凋落。臼田先生にとって耐え難かった。

「私が立て直してみせる」
並々ならぬ決意で第一期公募制選考に応募。そして2003年、母校へ念願の帰還を果たした。

日比谷の頑張り 他の公立校へのエール

臼田先生は、仲間とともにほぼゼロベースから進路指導の立ち上げに腕をふるっていった。高校3年間を見通した進路指導計画を作成。実力

試験、全国模試、保護者会、面談などを工夫して配置。その際、教務の経験が大いに生きた。日比谷の伝統は、全科目履修型の教養主義カリキュラム。教務的センスで理解しているから、教育課程(時間割)や年間行事計画の上にもうまく進路行事を割りふれたという。

03年からの3年間で進路指導システムを構築した。「放任」から、現在の「めんどろ見のいい」日比谷高校へと変わる原点は、その3年間に作られたといえる。

今年度の東大合格者数は37人になる。けれども生徒の進路に数値目標を課すことはない。生徒には学問の本質的なおもしろさや楽しさを味わわせたい。やらされるのではなく、「自己回転型」の学習態度を

身につけてもらいたい。そのような高校の姿勢がスーパーサイエンスハイスクール(SSH)の指定につながった。

また、「星陵セミナー」のような先輩」という行事で、各分野の第一線で活躍する卒業生から学ぶ機会を作るなど、多彩なキャリア教育の実現に臼田先生はもてる力を存分に発揮してきた。

日比谷を再建してきたという自負がある。母校への愛情だけではない、「使命感」もそこにあった。

「公教育は大切です。お金のない人も頑張れば成功できるという道筋は、絶対に死守されなくてはなりません。日比谷が頑張れば、他の公立校も頑張ります。日比谷は、公教育のフラッグシップだと思っています」

PLUS ONE

SSH海外派遣などを自らコーディネート

生物教師として若いころに勉強会や研修会を企画した経験が現在も存分に生かされている。例えばSSH海外派遣は業者任せにせず、先生のほぼ「手づくり」。ハワイ島4205m地点のすばる大望遠鏡に生徒を連れていく際、高山病にかかる危険性があった。すると先生は、なんと自ら事前に日本の山で高山病にかかってみて、シミュレーションをした。「生徒の安全を確保するには、それくらい当然です。『本物』を味わってもらうには、教師の企画力や行動力は重要です」

SSH海外派遣では、ハワイ島での天文、火山、植生などの学習のほか、米国の世界トップレベルの大学を訪れ、現地の大学生に対する英語インタビューなども生徒は行っている。

